

毛際可の燈謎詩について

呉, 修喆
九州大学大学院言語文化研究院 : 助教

<https://doi.org/10.15017/7405119>

出版情報 : 中国文学論集. 54, pp.67-84, 2025-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



毛際可の燈謎詩について

呉 修 喆

はじめに

『紅樓夢』などの中国古典小説には、燈籠に掲げられたなぞなぞを解く遊戲——「燈謎」がしばしば登場する。清中期以降、謎面（題）が比較的短く、読書人向けに創作された「今体謎」が主流となり、「文人の遊戲」とも呼ばれるようになった。

日本人と燈謎の接点は、今体謎が主流となる以前からあった。たとえば、中国古典に見られる隱語や離合詩などの影響を受け、古代から中世にかけて識字階級である貴族社会を中心に流行っていた「古典なぞ」がそれである^①。また、江戸中後期に書かれた文人隨筆にも、中国の燈謎に関する記述が散見する。ただし、そのほとんどは謎面が比較的長く、漢詩の形をとる「古体謎」であった。

明治期に入ると、日本で読まれた燈謎およびその感想は雑誌などに掲載されるようになる。たとえば、一八八二年八月三十一日発行の『洋々社談』第八九号に、西村泊翁^②と署名された「燈謎詩」という記事があり、清初の知識人毛際可（一六三三—一七〇八）^③による孟子人名燈謎連作十二首が転載されている。さらに、この記事は一九三六年十月に「燈謎詩と花名詩謎」というタイトルで斯文會の機関誌『斯文』に全文転載された^④。二度目に転載された際の冒頭には、「西村泊翁」こと西村茂樹についての短い人物紹介が付されているほか、「珍しいもので、之を人に語るに知らない者が多い。因て之を左に録して文雅好學の士に告げたい」という主旨説明も添えられている。

毛際可の燈謎詩について

実際に、この孟子人名燈謎詩連作の流布範囲は広い。毛際可とほぼ同時代の清代文人による隨筆に抄録されているのみならず、清代中後期に流通した小品文叢書や民国期の謎話^⑤などにも確認できる。本稿は、日本の雑誌等に転載された毛際可「燈謎詩」の典故調査を足がかりに、異本の整理・比較を通じてこの連作の作風・技法上の特徴を明らかにし、燈謎史における位置づけを再検討するものである。

一、流布形態と系統

『斯文』へ転載された際に比べ、『洋々社談』の「燈謎詩」には説明がほとんど見られない。冒頭には「清ノ毛際可、燈謎詩十二首アリ。一句中ニ孟子書中ノ人名一人ヲ匿セル者ニシテ、遽ニ之ヲ讀メバ其人名タルコトヲ知ラズ。エナリト謂フベシ^⑥」という短いリード文が付されているだけである。その後に十二首がずらりと転載され、答えはまとめて第十二首の後ろに記されている。さらに、その後ろには「又嚴允肇ト云ヘル人ノ詠ゼシ花名詩謎アリ、前ノ孟子人名ノ作ニ及バザレドモ、類ヲ以テ爰ニ併セ記ス」と二行挟んで、嚴允肇（生没年不詳^⑦）による「花名詩謎」四首が同じ形式で付録されている。

『洋々社談』および『斯文』のほか、一八九一年八月に発行された児童雑誌『少年園』においても、滝川亀太郎が天鈞居士の署名で発表した「支那の謎^⑧」という記事に毛際可の燈謎詩十二首が転載されている。ただし、当該記事はその出典を「清人の編せる昭代叢書の中に謎詩を集めたる書一卷」とするが、実際に毛際可の燈謎詩を収めるのは『昭代叢書』ではなく『檀几叢書』である^⑨。両叢書はいずれも張潮の編纂によるものであるため混同が生じたのかもしれない。あるいは、『昭代叢書』に収録されている別の謎集、黄周星『廋詞』と混同された可能性も否定できない。いずれにせよ、字句を比較すると、『檀几叢書』からの直接の転載ではないことは明らかである。たしかに『檀几叢書』に収められているのも十二首であるが、そのうち三首は『少年園』の記事に欠け、逆に、同記事には『檀几叢書』に見られない二首が含まれるため、両者の間に著しい相違がある。他方、「支那の謎」に掲載された十二首は、『洋々社談』に収録されたものと題目から解答に至るまで完全に一致する。つまり、滝川は『洋々社談』の

記事から孫引きしたか、あるいは西村と同一の転載元から十二首を採録したと推測される。次なる課題は、その転載元の特定である。

毛際可による孟子人名燈謎詩連作は、十二首本のほか、十六首本も存在する。一九九一年刊行の『中華謎書集成』には、これら二種類の異本が収録されており、十二首本は『檀几叢書』、十六首本は『娛萱室小品六十種』を底本としている。また同書には、その後ろに銭南揚『毛際可『燈謎』校勘記』（初出…『文虎』第二卷第十六期、一九三一年八月十五日）が付録されており、銭は校勘に際して五種類の異本を参照した。すなわち、『檀几叢書』『解人頤』『堅瓠集』に見られる十二首本と、『慧観室謎話』『娛萱室小品六十種』に見られる十六首本の二系統である。しかし、比較の結果、これらはいずれも日本で転載された十二首とは大きく異なる。ここで唯一の手がかりとなるのが、『中華謎書集成』における解題部分で言及される董含『三岡識略』である。同書は長らく原書所在不明のまま書誌情報のみ知られていたが、近年では台湾国立中央図書館蔵旧鈔本や、ベルリン国立図書館蔵道光二十四年（一八四四）写本が公開され、さらに『四庫未収書輯刊』収録の十卷本を底本とする点校本も刊行されている。これらを比較したところ、ようやく日本において転載された十二首と内容が完全に一致することが確認された。『三岡識略』に見られる十二首を含めてあらためて整理すると、毛際可の燈謎詩の流布形態は、大きく左記の三系統に分類できることが明らかに（詳しくは文末附表「毛際可燈謎詩異本比較」）。

系統A十二首 董含『三岡識略』卷三（一六五四～一六五八）

系統B十二首 褚人穫『堅瓠集』甲集卷之一（一六九〇）

王暉・張潮編『檀几叢書』余集卷上（一六九五）

錢德蒼編『新訂解人頤広集』卷五消悶集（一七六三）

系統C十六首 趙吉士『寄園寄所寄』卷四（一六九六）

周效璘『慧観室謎話』（一九一三）

雷瑄『娛萱室小品六十種』（一九一七）¹²⁾

異本間の差異を整理すると、字句上のわずかな違いを除き、謎底（解答）が一致するものを同一作とみなした場

毛際可の燈謎詩について

合、三系統に共通するのはわずか四首にすぎない。明治以降に日本の雑誌へ転載された十二首は、すなわち系統Aの『三岡識略』にのみ見られるものであった。『三岡識略』が西村茂樹の愛読書であったことは、彼が執筆した『東洋ノ種痘術』（『東洋学会雑誌』第七卷、一八八七年）や『詞曲小説』（『泊翁厄言』）などからも推測できる。¹³ それに加えて、毛際可の孟子人名燈謎詩十二首に続けて、厳允肇の花名詩謎（厳允肇から示された数十首のうちの四首）を収録するのは、やはり『三岡識略』のみである。以上の点から、日本の雑誌に見られる十二首の転載元は『三岡識略』であると確定できる。ちなみに、かつて東京帝国大学附属図書館には『西村集書』の一部として『三岡識略（附統編）』刊本十卷六冊が所蔵されていたことが『東京帝国大学附属図書館和漢書書名目録（増加第二）』（一九一一年）に記録されており、これが西村の所持本であったとみるのが妥当であろう。ただし、現在の東京大学附属図書館および東洋文化研究所図書室の蔵書には確認できない。

文末附表では、異文箇所を傍線で示し、整理番号を付している。番号の右にアスタリスク二つを付したものは、三系統において字句の差異がもつとも少なく、謎底が同一の作品であり、すなわち第1・第5・第15・第16の四首である。アスタリスク一つを付した第2・第11・第18首は、四首のうち一句が完全に異なる作品である。無印の番号は、特定の系統にのみ見られる作品、あるいは四分の一以上が異文となる作品である。さらに、太字で示した詩句は、別系統では別作品に組み込まれているものである。たとえば、系統A第6「贈友」の第二句「華堂廣廈貴游風〔屋廬子〕」は、若干字句を調整したうえで、系統C第12「少年行」の第一句として現れる。もう一例を挙げれば、系統A第13「村居」の第一・二句（謎底「戴不勝」〔百里奚〕）は、系統B第14「山行」および系統C第14「客況」では第三・四句として現れ、しかも「百里奚」「戴不勝」と順序が逆転している。このような事例はほかにも少なくない。

この現象の背景には、古体謎の作詩方法がある。漢詩の形式をとる古体謎は、一部の離合詩を除けば、基本的に一句ごとに一つの謎底を導く構造をもつ。すなわち、多くの古体謎は単句謎の集合体であり、複数の燈謎を連作形式にまとめたものとして捉えられる。それに加えて、謎解きに直接関わる文字だけでは詩形を整えることが難しいため、意味を補完したり韻律を調整したりするための語が付加される。また、多くの場合、謎底に至るための詩語

には複数の選択肢が存在し、詩作の要領を心得ていれば、異なる語句を自在に組み合わせることができる。そのため、骨格部分さえ保持されていれば、肉付けは比較的容易であり、詩形と韻律さえ整えば、句単位で別の燈謎詩に転用することも可能となる。

無論、このような改変は作者本人がもつとも巧みに行い得たはずであり、作者自身による加筆・修正や新たな創作である可能性も十分に考えられる。したがって、多様な異文は必ずしも伝播過程における誤記や混入によるものとは限らず、また、系統Aが成立年代のもつとも古い資料であるからといって、それを直ちに原作形態にもつとも近いと断定することはできない。『三岡識略』の「燈謎詩」序文には、作者に示されたという旨の記述が見られ、『寄園寄所寄』の抄録元『嘯虹筆記』の著者も毛際可の友人を自称している。これらを踏まえると、異本群をばらばらの伝承形態とみなすよりも、毛際可自身による一つの創作群と捉えるのが適切であろう。

二、作風と評価

毛際可の燈謎詩が数世紀にわたって広く読まれた理由は、趙吉士『寄園寄所寄』巻四に引く『嘯虹筆記』（作者不詳）の一文に端的に示されている。「燈謎詩は、前人の間にも作例はあったが、いずれも鄙俗で諷詠に堪えない。わが友、遂安の毛際可には燈謎十六首があり、首ごとに題が異なり、各句に古人名を隠す。その人名はすべて『孟子』に出典をもち、これによって燈謎に一生面を開いた（燈謎詩、前人間亦有之。然皆鄙俚、不足諷詠。予友遂安毛會侯令尹名際可、有燈謎詩十六首、每首各自為題、每句隱一古人性名、共在一部孟子内、為燈謎開一生面¹⁴）。また、『檀几叢書』に収録される燈謎詩の後ろには、「張山來曰、即作絕句觀、亦是佳構。矧屬燈謎乎¹⁵」との編者按語が添えられており、絶句としても優れ、まして燈謎としてはなおさら秀逸であると評されている。これらの評価から明らかにように、毛際可の孟子人名燈謎連作は、古体謎の伝統を受け継ぎながらも、従来の古体謎に比べて格調が高く、さらに同一の謎材（正しくは「底材」）によって連作を構成した点に独自性が認められる。この連作以前の古体謎に、同様の高い評価が与えられた例は見当たらず、格調を重んじる燈謎への志向はここから始まると考えられる。

毛際可の燈謎詩について

吟詠に堪える格調を有すると評されているが、燈謎としての巧拙をどう評価すべきか。その技巧性を明らかにするため、各異本に共通する冒頭の一首を例に考察する。各句の後ろに解答となる人名を記し、平仄・押韻を示す。

聖瑞

美玉無瑕輯瑞同〔白圭〕

●●●○○●●●○

美玉 瑕きず無くして瑞しよくを輯あつむこと同じ

岐豐佳處慶雲中〔周霄〕

○○○●●●○○○

岐豐の佳き處 慶雲の中

從天產下鱗蟲長〔龍子〕

○○○●●○○○●

天よ從り産まれ下る 鱗虫をさの長

兩道祥光一色紅〔丹朱〕

●●●○○●●●○

兩道の祥光 一色の紅

たしかに西村の述べるように、詩として読むだけでは即座に解答にたどりつくのは難しい。しかし、解答となる人名を参照すれば、その解き方は明快である。すなわち、詩句の文意から別の漢字を連想し、それらを組み合わせる人名を構成するという方法である。この例の場合、第一句では「美玉」から「圭」、「無瑕」から「白」を導き、第二句の「岐豐」は周の都邑であるため「周」を、そして「雲」から「霄」を連想する。第三句では「産」から「子」、「鱗蟲長」から「龍」を、第四句では文意に即して「紅」から「丹」と「朱」の二文字を連想する。かくして、各句で得た文字を句ごとに組み合わせれば、解答にたどりつくのである。これは「会意体」と呼ばれる典型的な古体謎の作謎法であり、同種の技巧による燈謎詩は明末の日用類書に数多く収録されている。

燈謎の会意体について、中華民国期に今体謎の流行を牽引した謎人の一人である張起南（一八七八―一九二四）⁽¹⁶⁾は次のように述べている。

謎以會意為最正大、亦最普通。無論用典、白描、正扣、反扣、凡以字義替貼者、皆不離乎會意者近是。⁽¹⁷⁾

謎は会意をもつとも最も正大となし、またもつとも普通とする。典故を用いるも、白描するも、正面から当てはめるも、逆に当てはめるも、凡そ字義をもつて替え貼るものは、みな会意から離れず、これに近いものである。

また、古人名を謎底とする燈謎については、創作者にとつての予想外の難しさをこのように語っている。

以古人名作謎底、數千年來見諸史冊者、何止恆河沙數、於中取一人焉、不啻滄海一粟、以為取不盡、而用不竭矣。而其實不然、蓋作謎、必擇其昭昭在人耳目者用之、若冷僻生澀、雖佳亦不足道。然人所最熟者、無過四書、

而可作謎料者、又無過孟子。毛際可有孟子人名詩十六首、蘭湄幻墨⁽¹⁸⁾中亦有此製、已網羅無遺。其次則爲左傳、而其間難記者、亦居大半。至於歷代名人、能有幾何。製謎者亦不過就其憶及者爲之、安能從姓氏譜中、一一按索耶。故人名謎之膾炙人口者、殊不多觀。⁽¹⁹⁾

古人の名を謎底とする場合、数千年來史書に記載された人名は、数えきれないほど見出される。その中から一人を選ぶのは、まさに滄海の一粟に等しく、あたかも無尽蔵に思われる。しかし實際はそうではない。なぜなら謎を作るには、必ず人々に広く知られた人物を選ぶ必要があり、もしも冷僻で生硬な名であれば、たとえ佳作であっても語るに足りないからである。しかし人々がもつとも熟知している典籍は四書であり、その中で作謎の材料としやすいのは、『孟子』を超えるものはない。毛際可に孟子人名詩十六首があり、『蘭湄幻墨』にも模作が見られ、『孟子』中の人名はすでに網羅し尽くされている。その次は『左伝』であるが、その中で記憶にとどめにくい人名も、また大半を占めている。歴代の有名人に至っては、謎に用いられる数はごく限られている。結局のところ、謎を作る者はただ自らの記憶にある人物を材料とするほかに、姓氏譜から一つ一つ探し求めるわけにはいかない。ゆえに、人口に膾炙する人名謎は、とりわけ多くは見られない。

ここでは毛際可作「孟子人名詩十六首」の優劣について直接的な評価は示されていないものの、人口に膾炙する名作として位置づけられていることは看取できる。前述のとおり、西村茂樹を含め、それを転載した読書人の間では、毛際可の燈謎詩は高く評価されていた。しかし、今体謎を積極的に推奨した謎人や近代の謎史研究者の間では、必ずしもそうではなかった。たとえば、今体謎の創作指針として広く知られる費源『玉荷隱語』の凡例では、それはむしろ反面教師として言及されている。

舊謎衍成詩句者、類多趁韻、其支詞腰句、觀者尤易眩目、且有近牽強者。如毛會侯先生孟子中人名謎流傳已久、而「君家季父還猶豫（子叔疑）」等句、未免如劉舍人所譏課文了不成義。⁽²⁰⁾茲集概不敢效顰。

詩句として書かれた従来の燈謎は、多くが韻を踏むことにこだわって、補助的な語句や付け足しの表現によって、読者はいつそう惑わされやすく、無理なこじつけに近いものもある。毛会侯先生の孟子人名謎は久しく流布しているが、「君家季父還猶豫（子叔疑）」などの句は、劉舍人が批判したように、文として意味をなさない。この集（『玉荷隱語』）では概してそのような謎を模倣しないつもりである。

毛際可の燈謎詩について

ちなみに、「文として意味をなさない」例として費源が挙げたのは、文末附表の第五首である。

嘲一家低棋 一家の低棋を嘲る

滿苑棋聲暑氣收〔奕秋〕

●●○○●●●●●●

滿苑の棋聲^{きせい} 暑氣収まる

乃翁局敗少機謀〔公輸子〕

●●○○●●●●○○

乃翁^{だいおう} 局に敗れて機謀^{きぼう} 少なし

君家季父還猶豫〔子叔疑〕

○○●●●●○○●●

君が家の季父^{きふ} なお猶豫^{うい} す

爲語兒童且自休〔子莫〕

●●○○●●●●○○

兒童の爲に語ぐ^{かた} 「且く自ら休めよ」と

前掲の冒頭の一首と比較すると、題材が日常的であるために、たしかに格調にやや落差を感じさせる。しかし、必ずしも文義が破綻しているわけではなく、むしろ近体詩の格律を保ちつつ漢字の多義性を巧みに用いて作られた印象を与える。費源が「旧謎」と称した作風は、すなわち謎史研究者銭南揚がいう「古体」である。銭は、清代初期の謎について次のように述べている。

清初謎語、上結元明之局、下開同光之端。若毛際可之燈謎、周工亮〔周亮工〕之字觸、黃周星之廋詞、以及錢德蒼之解人頤、咄咄夫之一夕話、猶未改元明之舊也。此外、雜記所收、亦多古體²²。

清初の謎語は、元・明の伝統を受け継ぎ、同治・光緒年以降の流れを開いた。たとえば、毛際可『燈謎』、周亮工『字觸』、黃周星『廋詞』および錢德蒼『解人頤』、咄咄夫『一夕話』に見られる謎は、なお元・明の古い作風を改めていない。このほか、雜記に収められた謎も、古体が多い。

しかし、注意すべきは、ここで挙げられている周亮工『字觸』が清代以前の書から析字（漢字の字形を構成要素に分解すること）に関する資料を蒐集したものである点である。また、錢德蒼『解人頤』や咄咄夫『一夕話』は、元・明時代に流行した燈謎を輯録したものであり、その内容は清初期に新たに作られた謎ではない。つまり、「古い作風を改めていない」とされるのは、むしろ自然といえる。一方、黃周星²³の『廋詞』は、彼とその友人ら数名が創始したとされる「酒令燈謎」を収めたもので、当時のほかの謎集とは一線を画する革新的な作風を有している。したがって、実際に「元・明の伝統を受け継ぎ、同治・光緒年以降の流れを開いた」といえるのは毛際可のみであるが、表面的な形式にもとづいて「古い作風を改めていない」と断じるのは、やはり粗略な評価といえよう。そこ

で、明末日用類書に収録された人名謎二首を参照し、比較を行いたい。

吾兒之子有施爲〔孫權〕

○○○●●○○○

吾が児の子 施爲有り

鑿壁偷光夜讀書〔孔明〕

●●●○○●●○○

壁を鑿ちて光を偷み 夜 讀書す

縫線路中常憶母〔子思〕

○○●●●○○●●●

縫線の路中 常に母を憶ひ

教人終日倚門閭〔呂望〕

○○○○●●●○○○

人をして終日門閭に倚らしむ

傍流築室倚江湖〔伊川〕

●○○●●●○○○

流れに傍ひて室を築き 江湖に倚る

門遶青巒浪拍廬〔山濤〕

○●●○○●●○○○

門 青巒に遶らわれ 浪 廬を拍つ

走避是非甘隱遁〔陶潛〕

●●●○○○○●●●

走りて是非を避け 隱遁を甘んず

蒼天感戴幸無虞〔謝安〕

○○○●●●○○○○

蒼天に感戴して幸いに虞無し

謎面だけを比較すると、毛際可の燈謎詩と大差がないように見える。しかし、日用類書や各種謎集に収録される右のような人名謎は、謎底となる人名に統一性を欠き、解答過程において諧音に依存する例が少なくない。たとえば「教人終日倚門閭」の一句は、本来、文義から連想される文字は「屢望」であるはずだが、人名とするには「屢」を「呂」に置き換えねばならない。また「傍流築室倚江湖」と「走避是非甘隱遁」の二句も同じように、それぞれ「依」を「伊」、「逃」を「陶」とする置換が施されている。

そして、最大の相違点は、同一の底材を用いる十数首の連作が並ぶ際に生じるインパクトであろう。清代以前の古体謎は基本的に単発で制作され、有名文人の作と称される一部のものを除き、作者名は記さない。これに対し、毛際可の燈謎詩は、文人的気質の色濃いまとまった一つの創作群として成立し、燈謎を個人の文学作品として位置づける新たな潮流を開いたと考えられる。

三、模作と長文燈謎の誕生

毛際可の燈謎詩は読書人の関心を惹き、燈謎創作の手本として受容されたことは、『蘭湄幻墨』などに見られる模作によって確認できる。ただし、張起南が指摘するように、人名謎は一見容易に作れそうでありながら、実際にかなり難しい。とりわけ作謎に適した底材としての『孟子』中の人名は、すでに毛際可ら前人によってほとんど取り尽くされていた。また、毛際可の孟子人名燈謎詩では、底材の統一性が保たれている一方で、聖瑞から日常生活に至るまで題材の幅が広く、全体としてやや散漫な印象を与える。そこで、靳榮藩（一七二六—一七八四）の模作では、燈謎詩を四首に縮減しつつ、春夏秋冬と、四季の風物を題材に統一し、連作全体を通読できるよう構成上の工夫が凝らされている。

毛會侯有孟子人名詩、偶傲其體。春遊云、律轉阳回淑氣和（景春）、垂楊林外好風多（柳下惠）、呼兒趣取芳郊遠（告子）、斗酒雙柑滿眼過（戴盈之）。夏景云、消暑何妨脫小冠（子夏）、興來攜幼共盤桓（子游）、芙蕖競發濂溪水（華周）、濂溪南華一樣看（莊子）。秋興云、滿林霜葉淺深紅（丹朱）、正好揮絃對晚風（琴張）、直待月華當午夜（時子）、棋奩散在脫梧中（奔秋）。冬意云、麝麝細柳盡皆無（淳于髡）、雪擁藍關對畫圖（文公）、恰喜年來無一事（長息）、圉人狐貉正相須（牧皮）。

毛会侯に孟子人名詩あり、偶に其の体做う。「春遊」云はく、「律轉りて陽回り、淑氣和やか（景春）。垂楊林の外、好風多し（柳下惠）。児を呼びて趁ひ取らしむ芳郊遠し（告子）。斗酒双柑、眼に満ちて過ぐ（戴盈之）。」「夏景」云はく、「消暑に何ぞ妨げん小冠を脱ぐを（子夏）。興来りて幼を携へ、共に盤桓す（子游）。芙蕖、競ひ発く濂溪の水（華周）。濂溪南華、一樣に看る（莊子）。」「秋興」云はく、「林に滿つ霜葉、淺深の紅（丹朱）。正に好し揮絃して晚風に對す（琴張）。直ちに待つ、月華の午夜に當るを（時子）。棋奩、散在す、脱梧の中（奔秋）。」「冬意」云はく、「麝麝たる細柳、尽く皆無（淳于髡）。雪、藍関を擁して画图に對す（文公）。恰も喜ぶ、年來一事も無きを（長息）。圉人、狐貉正に相須つ（牧皮）。」

詳しく見ると、毛際可の作に比べて典故の使用が格段に多いことが確認できる。たとえば、「斗酒雙柑滿眼過」の句には、南北朝宋の学者戴顒が蜜柑二つと酒一斗を携えて春遊した故事が援用されている。「濂溪南華一樣看」の句

では、「濠濮間想」の故事とともに莊子の別名である「南華真人」の知識を前提としている。また、「麤麤細細柳盡皆無」の句は「髡」という剃髪刑罰を隱喩的に用いており、「雪擁藍關對畫圖」の句では、諡号が「文公」とする韓愈が残した詩「左遷至藍關関示姪孫湘」および周易の爻辞を作った周公旦（周文公）を踏まえている。このように典故を多用する傾向は、同時期に燈謎の主流となりつつあった今体謎の作風と軌を一にしている。

この流れを受け継ぐかのように、清末には謎面を短縮化した今体謎が主流となる一方で、もう一つ見落とされがちな動向として、同一底材・同一題材による連作形式の長文燈謎も盛んに作られるようになった。その代表的な例は、陳森『品花宝鑑』に見られる往復書簡謎である。それは二通の恋文として、全体的に優美な詞藻で綴られていながら、薬名・花名をそれぞれ二〇個隠している。会意法を主としつつ典故を織り交ぜ、文学性を損なわない形で燈謎としても成立させている点は注目に値する。『品花宝鑑』の往復書簡謎を模倣し、近代の謎人らはさらに文字数の多い長文燈謎を創作した。たとえば、薛鳳昌『濠濮齋謎話』に収録された生花館主の「聊目（聊斎志異の編目名）謎」信書は二九六字の中に五〇個の聊目を隠しており、張起南が『橐園春燈話』の冒頭に付した「擬集謎海戲為徵文啓（隱聊齋目錄）」には三七八字で六〇個の聊目が仕込まれている。さらに謝雲声『靈簫閣謎話初集』所収の高閑仙「序・続春燈話」では、七〇八字の文章に一四二個の薬名謎が組み込まれ、会意・典故に加え、離合法や謎格（燈謎における特殊ルール）といった技巧も駆使されている。『靈簫閣謎話初集』第二巻にはさらに多くの作例が収められており、この形式が清末から民国期にかけて広く流行したことが確認できる。

おわりに

本稿では、日本で転載された毛際可「燈謎詩」の典故調査を起点とし、孟子人名燈謎詩連作に三系統の異本が存在することを明らかにした。さらに、それらを整理・比較することで、毛際可による燈謎詩の作風や技法上の特徴をより包括的に把握することができた。

今体謎が流行して以降、毛際可の作品は謎人や謎史研究者から高く評価されず、清初期の古体謎代表作としての

み言及されるにとどまった。しかし、明末日用類書に収録されている人名謎と比較すると、連作としての文学的価値が際立つ。こうした作品は近代日本の知識人を含む読書人の燈謎に対する興味を喚起し、模作を生んだ。謎面の短い今体謎が大成した後も、毛際可が切り開いた同一底材連作燈謎の系譜は途絶えることなく、長文燈謎という形で謎人たちの創作意欲を刺激し続けている。

注

- (1) 「古典なぞ」に関しては、鈴木棠三『なぞの研究』（講談社、一九八一年）に詳しい。
- (2) 西村茂樹（一八二八～一九〇二）明治期の啓蒙思想家。十歳から佐倉藩の藩校である成徳書院に入学し、儒学を学び、十七歳で御定の四書小学に成就したという。文部省編書課長として勤務するかたわら、明六社の設立に注力し、明治八年（一八七五）に洋々社を結成し、機関誌『洋々社談』を創刊する。
- (3) 毛際可、字は会侯、鶴舫と号す。浙江遂安（現在の浙江省淳安县）の人。清順治十五年（一六五八）の進士。毛奇齡・毛先舒とともに「浙中三毛」と称される。著作に『松皋文集』などがある。
- (4) 松野緑「燈謎詩と花名詩謎」『斯文』第一八編第一〇号、一九三六年、二七～二九頁。
- (5) 謎人（燈謎創作者）の活動状況、燈謎作品の批評、燈謎の歴史や創作論などを内容とした文章。
- (6) 西村泊翁「燈謎詩」『洋々社談』第八九号、一八八二年、一頁。
- (7) 嚴允肇、字は修人。浙江帰安（現在の浙江省湖州市）の人。順治十五年（一六五八）進士。著作に『石樵詩稿』がある。
- (8) 天鈞居士「支那の謎」『少年園』第六卷第六七号、一八九一年、一五頁。
- (9) 近年出版された『毛際可集』（陳君点校、浙江古籍出版社、二〇一七年）は附録「詩補遺」の最後に『檀几叢書』からの十二首が収録されている。
- (10) 高伯瑜等編『中華謎書集成』（第一冊）、人民日報出版社、一九九一年、二五五～二六二頁。

(11) 董含、明天啓五年（一六二五）生、没年不詳。字は閩石、または榕城。蒼水、または贅客・莚鄉贅客と号す。松江華亭（現在の上海市松江區）の人。順治一八年（一六六一）に進士をとるも、数ヶ月後に江南奏銷案により褫革されてしまう。その後、故郷に帰り多くの著述を残している。『三岡識略』は順治元年（一六四四）から康熙三十六年（一六七七）まで書き連ねた筆記である。

(12) 吳克岐『犬窩謎話（稿本）』（南京図書館蔵、成立年代不詳）には右記の三系統に見られる十八首がすべて抄録されているが、出典は記されていない。吳克岐（一八七〇年頃～一九三五年頃）、字は軒承。紅樓夢裏人、懺玉生などと号す。江蘇盱眙の人。著作に『盱眙譚紅』などがある。『紅樓夢』研究家として知られる。

(13) 西村茂樹『泊翁叢書』第1輯、博文館、一九〇九年、四五六頁。

(14) 趙吉士『寄園寄所寄』、内閣文庫蔵林家（大學頭）衙蔵版、卷四「捻須寄詩原」二二～二三頁。

(15) 王暉・張潮編『檀几叢書』上海古籍出版社、一九九二年、四二九頁。

(16) 張起南、字は味鱸。橐園と号す。福建永定（現在の福建省竜巖市）の人。一九〇一年に湖南辰州で「蓬萊謎社」を創立し、一九一六年に兄の張超南とともに「北平射虎社」に入り、同年の『小説月報』で「橐園春燈話」を連載する。『謎聖』と呼ばれる。

(17) 張起南『橐園春燈話』卷上、商務印書館、一九一七年、二六頁。

(18) 曹華彬『蘭湄幻墨』第三編に「続毛鶴舫燈謎詩」七言絶句十二首が収録されている。武林竹簡齋より清光緒二〇年（一八九四）に出版された石印本二編五冊ある（中国国家図書館・中国芸術研究院芸術与文献館所蔵）。

(19) 張起南『橐園春燈話』卷上、前掲、七九頁。

(20) 劉勰『文心彫龍・指瑕第四十一』「雅頌未聞、漢魏莫用、懸領似如可辯、課文了不成義、斯實情訛之所變、文澆之致弊。（雅頌も未だ聞かず、漢・魏も用うる莫し。懸領すれば、弁ず可きが如きに似るも、文に課すれば了に義を成さず。斯れ実に情訛の変ずる所、文澆の弊を致せり）」

(21) 費源『玉荷隱語（附群珠集）』国文学資料館蔵唐本袖珍本コレクション、一七八〇年、「凡例」一・二頁。作者の費源は生没年不詳、字は星田。裕福な家に生まれ、終生功名を求めず、苕南布衣と号す。浙江呉興（現在の浙江省湖州

毛際可の燈謎詩について

市)の人。自宅の庭園内に聴月楼を築き、月に二回そこで友人らと文会を開く。

- (22) 錢南揚『謎史』国立中山大学語言歴史研究所、一九二八年、七九頁。錢南揚(一八九九〜一九八七)、名は紹箕(肇基)、字の南揚を通用する。浙江平湖の人。一九一九年に北京大学国文学門中文科に入学、民間文学・小説戯曲を専攻。在学中に『謎史』を完成し、一九二五年に卒業後、中学の国文教員などを経て、南京大学中文系教授。

- (23) 黄周星(一六一一〜一六八〇年)、字は九煙、または景虞。圃庵、而庵、笑蒼道人などと号す。明崇禎十三年の進士。

- (24) 徐会瀛編『新鐫燕台校正天下通行文林聚宝万卷星羅』(福建建陽書林静観室詹聖謨刊本、一六〇〇年)をはじめとする数種類の日用類書・燈謎集に見られる。呉修詰校訂・訳注『明末日用類書燈謎選集』、文学通信、二〇二三年、七五頁。

- (25) 靳榮藩『緑溪語』下巻、二頁(呉平・徐徳明編『清代學術筆記叢刊』21、学苑出版社、二〇一六年、三八四頁)。靳榮藩、字は個人。緑溪と号す。山西黎城の人。乾隆一三年(一七四八)の進士。著作に『詠史偶稿』などがある。『緑溪語』二巻は乾隆四二年(一七七七)に成立した。

- (26) 陳森『品花宝鑑』古本小説集成(道光二九年〔一八四九〕初刊、上海古籍出版社蔵後刊本影印)、上海古籍出版社、一九九二年、三八二〜三八四頁。

その他主要参考文献(出版年順)

周效璘『慧観室謎話』『庸言』第一巻第六號、一九一三年、「芸林四」一〜四頁。

薛鳳昌『邃漢齋謎話』商務印書館、一九一七年

謝雲声『靈簫閣謎話初集』廈門新民書社編訳部、一九三〇年

錢德蒼編『新訂解人頤広集』、高伯瑜等編『中華謎書集成』(第一冊)、人民日報出版社、一九九一年、二六五〜二六六頁。

王暉・張潮編『檀几叢書』上海古籍出版社、一九九二年、四二八〜四二九頁。

褚人穫『堅瓠集』、上海古籍出版社本社編『清代筆記小説大観』(二)、上海古籍出版社、二〇〇七年、六二七〜六二八頁。

趙吉士輯撰/周曉光・劉道勝点校『寄園寄所寄』、黄山書社、二〇〇八年。

董含著/于德源点校『三岡識略校注』、北京燕山出版社、二〇一八年。

附表 毛際可燈謎詩異本比較

4	3	2*	1**	
	蝶舞鶯啼草色萋〔景春〕 郊門回首日初低〔東郭氏〕 延來師席多怡憚〔傳說〕 蠹簡藝編滿染齊〔萬章〕	閑適 雅頌原非鄭衛聲〔樂正子〕	聖瑞 美玉無瑕輯瑞同〔白圭〕 岐豐佳處慶雲中〔周霄〕 從天產下鱗蟲長〔龍子〕 兩道祥光一色紅〔丹朱〕	系統A十二首 董含『三岡識略』卷三 (一六五四—一六五八)
	節屆陽和萬彙蘇〔景春〕 降藩歸化效前驅〔王順〕 北門鎖鑰推良佐〔司城貞子〕 絕域從今按版圖〔貊稽〕	王會圖 虎旅歸來已罷兵〔畢戰〕 關梁無禁任遙征〔許行〕 九重天子稱仁聖〔王良〕 異獸趨朝負輦行〔象〕	聖瑞圖 美玉無瑕輯瑞同〔白圭〕 岐豐佳氣慶雲中〔周霄〕 從天產下鱗蟲長〔龍子〕 兩道祥光一色紅〔丹朱〕	系統B十二首 褚人穫『堅瓠集』 甲集卷之一(一六九〇) ほか
	節屆陽和萬彙蘇〔景春〕 降藩歸化效前驅〔王順〕 北門鎖鑰推良佐〔司城貞子〕 絕域從今按版圖〔貊稽〕	凱歌 虎旅歸來已罷兵〔畢戰〕 關梁無禁任遙征〔許行〕 九重天子稱仁聖〔王良〕 異獸趨朝負輦行〔象〕	王會圖 美玉無瑕輯瑞同〔白圭〕 岐豐佳氣慶雲中〔周霄〕 從天產下鱗蟲長〔龍子〕 兩道祥光一色紅〔丹朱〕	系統C十六首 趙吉士『寄園寄所寄』 卷四(一六九六) ほか

毛際可の燈謎詩について

9	8	7	6	5**
		田家 垂楊枝上漏春光〔泄柳〕 歸去來詞獨擅場〔顏回〕 從此塵勞還久歇〔長息〕 止將田事祀勾芒〔神農〕	贈友 綠柳陰中點絳紅〔楊朱〕 華堂廣廈貴游風〔屋廬子〕 無心邂逅皆年少〔逢蒙〕 一諾何妨縞紵通〔然友〕	嘲低棋 滿苑棋聲暑氣收〔奕秋〕 乃翁敗局少機謀〔公輸子〕 君家季父還猶豫〔子叔疑〕 爲語兒童旦少休〔子莫〕
	家慶 弦管聲調約袖裁〔樂正裘〕 長男濟困散家財〔孟施舍〕 更傳遲暮添丁好〔晏子〕 疑是錢鏗改姓來〔彭更〕	高隱 垂楊枝上漏春光〔泄柳〕 歸去來詞獨擅場〔晉文〕 聖主南山容霧隱〔王豹〕 素絲良馬爲誰忙〔綿助〕	金蘭會 綠柳陰中點絳紅〔楊朱〕 良材勝任棟方隆〔紀梁〕 少年意氣皆堪托〔季任〕 一諾何妨縞紵通〔然友〕	嘲一家低棋 滿苑棋聲暑氣收〔奕秋〕 乃翁敗局少機謀〔公輸子〕 君家季父還猶豫〔子叔疑〕 爲語兒童且自休〔子莫〕
感舊 弦管聲調約袖鮮〔樂正裘〕 當年遺跡幾推遷〔陳代〕 南樓清興原如此〔庾公之斯〕 却喜塵勞久已捐〔陳辛〕	家慶 舊事追思陟鼎臺〔陳相〕 長男濟困散家財〔孟施舍〕 更傳遲暮添丁好〔晏子〕 疑是錢鏗改姓來〔彭更〕	歸田樂 垂楊枝上漏春光〔泄柳〕 歸去來詞獨擅場〔晉文〕 從此塵勞皆頓歇〔長息〕 素絲良馬爲誰忙〔綿助〕	贈友 綠柳陰中點絳紅〔楊朱〕 良材勝任棟方隆〔紀梁〕 少年意氣皆堪托〔子襄〕 一諾何妨縞紵通〔然友〕	嘲一家低棋 滿苑棋聲暑氣收〔奕秋〕 乃翁敗局少機謀〔公輸子〕 君家季父還猶豫〔子叔疑〕 爲語兒童且自休〔子莫〕

14

13

12

11*

10

毛際可の燈謎詩について

	湯餅會 將逢彌月祝無災〔浩生不害〕 繡褸啼聲出戶來〔子產〕 諸子兒郎皆長大〔公孫衍〕 含飴最喜是初孩〔季孫〕		春遊 春日問花花解語〔桃應〕 綠楊樹底午風和〔柳下惠〕 東鄰相對憐嬌小〔西子〕 爭似椒房絕艷多〔宮之奇〕		村居 衰年負荷苦難禁〔戴不勝〕 路遠空懷顧僕心〔百里奚〕 少弟仔肩能代力〔季任〕 餘閑試鼓爨桐音〔琴張〕
山行 岩嶢西嶽接西京〔華周〕 天際冥鴻物外清〔飛廉〕 莫道途遙頻顧僕〔百里奚〕 衰年負荷嘆勞生〔戴不勝〕			宮詞 春日問花花解語〔桃應〕 良緣欲就轉橫波〔成醜〕 東鄰相對憐嬌小〔西子〕 爭比椒房絕艷何〔宮之奇〕		
客況 岩嶢西嶽接西京〔華周〕 天際冥鴻物外情〔飛廉〕 莫道途遙頻顧僕〔百里奚〕 衰年負荷托勞生〔戴不勝〕		少年行 廣廈華堂俠少遊〔屋盧子〕 更偕同輩結綢繆〔曹交〕 端居忽覺雄心起〔莊暴〕 反哺慈禽一網收〔烏獲〕	春閨 春日問花花解語〔桃應〕 兒家庭樹綠楊多〔子柳〕 東鄰相對憐嬌小〔西子〕 爭比椒房絕艷何〔宮之奇〕		湯餅會 將逢彌月祝無災〔浩生不害〕 繡褸慙慙抱擁來〔慎子〕 諸子兒孫皆長大〔公孫衍〕 含飴最喜是初孩〔曾元〕

18*	17	16**	15**
老農 中男驅犢向前村〔牧仲〕 鶴髮山翁暮倚門〔太公望〕 更與諸兒相共語〔告子〕 年來齒落復生根〔易牙〕		宮怨 夜永鷄鳴漏未收〔景丑〕 官家沉醉百無憂〔王驢〕 蛾眉一色誰相讓〔顏般〕 南院光輝對院幽〔北宮黝〕	村學究 身長七尺皓鬚眉〔高叟〕 俯首長如持滿時〔戴盈之〕 村塾全然無約束〔師曠〕 任兒攜幼浴清池〔子濯孺子〕
老農 中男驅犢向前村〔牧仲〕 萬事全拋靜掩門〔長息〕 更與諸兒相共語〔告子〕 年來齒落復生根〔易牙〕		宮怨 夜永鷄鳴漏未收〔景丑〕 官家清豫百無憂〔王驢〕 蛾眉一色誰相讓〔顏般〕 南院光輝對院幽〔北宮黝〕	嘲村學究 身長九尺皓鬚眉〔高叟〕 俯首長如持滿時〔戴盈之〕 村塾全然無約束〔師曠〕 任兒攜幼浴清池〔子濯孺子〕
村居 中男驅犢向前村〔牧仲〕 須避南山百獸尊〔陽虎〕 更與諸兒相共語〔告子〕 年來齒落復生根〔易牙〕	春怨 欲絕良緣美自窺〔成覲〕 檀郎年少好豐姿〔子都〕 爲伊消瘦腸回轉〔瘡環〕 細數更籌夜半知〔時子〕	宮怨 夜永鷄鳴漏未收〔景丑〕 官家沉醉百無憂〔王驢〕 蛾眉一色誰相讓〔顏般〕 南院光輝對院幽〔北宮黝〕	嘲村學究 身長九尺皓鬚眉〔高叟〕 俯首長如持滿時〔戴盈之〕 村塾全然無約束〔師曠〕 任兒攜幼浴清池〔子濯孺子〕